

王希天一中国のために尊厳を守った人

王鈺強（王希天の子／王希天研究会理事）

皆様、こんにちは。

私は王希天の子、王鈺強と申します。まず、関東大震災94周年にあたって、王希天と中国人受難労働者追想の会を準備された皆様、ならびに本日ご出席された友人の皆様に礼を申し上げます。

94年前の今日は、祖父王希天の遭難の日です。94年を経た今日、その故郷からやってきた親族、並びに在日華僑、日本各界人士の皆様がここに集い、厳粛に王希天及び受難労働者追想の会を行い、この祖国を愛し、中国人労働者の為に献身した義士王希天を追想することは、意義深いことであり、その精神は気高いことです。

私は王希天遺族を代表して、本日の追悼の集いに参加された皆様に心からの感謝とこの上ない敬意を表したいと思います。中国には「初心忘るべからず、友人忘るべからず」という言葉があります。ここに、中国の王希天研究会および中国政府が王希天烈士に関心を寄せて下さることに特別の感謝の意を表します。まさに皆様の努力によって王希天烈士の足跡を今日まで引き継いで追想することができるのです。

歴史をふり返れば、両国が大規模に王希天を記念するようになったのは80年代の半ばの日本においてでした。一つは、日本の記者である田原洋先生が一冊の書『関東大震災と王希天事件』を著し、当時日本で研修していた長春電信局局員の金さんを通じて王希天の遺族を捜し始めたことです。次いで、日本宋慶齡基金副理事長で日本教職員組合の仁木ふみ子さんが『関東大震災と中国人虐殺』を書かれたことが、もう一つのきっかけです。彼女が、中国温州に、まだ健在だった多くの華工たちを訪ねた時、みな一様に王希天について語りました。王希天の献身的な人道的行為を追想し、歴史を反省するために、仁木ふみ子さんは日本教職員組合から200万円の募金を集め、中国浙江省温州市の華蓋山の上にある王希天記念碑を再建しました。私と遺族たちは、日本教職員組合、温州各界人士とともに、当時、落成式に参加しました。

その後、姉の王旗の努力のもとで、中国吉林省長春市の王希天の故郷九龍園に、王希天記念碑（館）を建立することができ、その1994年9月4日に王希天研究会は初めて記念追悼会を行い、それからすでに20数年になります。現在に至るも、多くの王希天を熱愛



する団体および人士が、各種の活動を継続してきたので、追想・記念活動を現在まで継続することができました。

王希天は、早い時期に日本に行き、科学技術による救国を追求し、国家の尊厳に関心を持つ人としてその名に恥じず、27年の歳月を費やして、中国を愛し、大衆のために献身する詩編をつづりました。私たちが、今日、彼のことを今一度追悼し、彼の業績を回想することは、全世界人民の平和友好を実現し、決して戦争を起こさないようにするうえで、非常に重要な意義あることです。

一、中国のために、決然として日本に渡り、救国の道を探る

祖父王希天は、かつて言ったことがあります。「吾輩は、中国において、勉学出来ぬに非ず、学問研究出来ぬに非ず。されど国内の環境は劣悪なり、故に国外に行かん。彼等の文化・学術・思想を研究し、以て祖国の参考とせんがためなり」と。

この話は、彼の祖国の発展、建設への壮大な志向を表し、彼は、国家を強壮にし、民衆の苦難を解決する思想を抱いて、日本にやって来て、明治維新の改革後、日本が如何にして国を富ませ、民を強くしたかを探求しました。当初、彼は科学技術をもって国の為になろうとして鉱山採掘の技術を学びましたが、後に政治経済学の学習に換えました。彼の認識の変化、成長は大量の自分自身の学習と社会实践を通して生まれたものです。彼の日本滞在期間は短いとは言えず、世界先進国の発展戦略をはっきり見定め、彼らのような知識があり、理想に燃えた若者が、知識を修め祖国に貢献するのは必要なことです。これが、すなわち彼が日本へ留学した目的です。

二、中国の尊厳を守るために、軍事密約拒否の反撃に決起する

1917年、腐敗した無能な旧中国政府は、当時の日本政府に「中日共同防敵軍事協定」の調印を迫られ、祖父王希天等愛国留学生の巨大な憤激を呼び起こしました。彼は講義の時間を借りて、新聞を手に級友たちに大声で次のように訴えました。“国家の興亡は、一般民衆にも責任がある。諸君は新聞が掲載する「中日軍事密約」を見てないのか。我々は直ちに共同して反対しよう。”と、大胆にも反帝愛国の革命スローガンを提起し、同時に日本東亜高等予備学校に学ぶ周恩来等の級友留学生と連合して、“留日学生救国団”を組織し、綱領、スローガン、任務を定め、まず日本各地で売国行為に反対するために、軍事密約拒否会なり抗議集会を開催し、授業ボイコットして帰国しました。

1918年初めには、2000名以上の留学生が呼びかけに応じて帰国し、それは留日学生の三分の二を占めました。彼等は北京に帰った後、ただちに鄧中夏、許徳珩と連絡を取り、さらに李大釗〔中国共産党創設者の一人〕とも会見して支持を得ました。北京で愛国大会



第一高校在学中の王希天（前列右から二人目）と周恩来（右端）

を開催し、又北京の学生2000名以上を加えて総統府に請願行動を行い、「中日共同防敵軍事協定」の取り消しを要求しました。これは中国学生が行った前代未聞の示威行動であり、中国学生の最初の大規模な反帝愛国闘争でした。日本の侵略と北洋政府の無能に反対するために、祖父は北京の留日学生と一緒に

“留日学生救国団支部”を組織し、北京、天津、上海の各救国組織と呼応して、勇ましく盛大な愛国拒約運動を半年の永きに亘って持続させ、その声は全国に響き渡りました。規模の大きさ、範囲の広さ、影響の深さはかつてないものでした。それは中華民族の愛国的な革命精神を十分体現するものでした。

三、中国人労働者のために奉仕し、誠心誠意を尽くす

軍事密約拒否運動の洗礼を経て、祖父王希天の思想は大きく成熟し、愛国思想と救国の責任感は新しいレベルに達しました。日本の中国人労働者に関心を抱くようになり、特に浙江省温州の同胞は、文化水準が低いため、経済的に不利な影響を受け、生活は思うようにはいかず、生業も困難を極めた。これに対して、中国駐日総領事館はそっぽを向いており、中国人労働者は困難を訴える処もなく、人にいいように騙されていました。祖父は、中国人労働者の中に入って実際の状況調査を進めました。訪問調査の後、祖父は、みんなを組織し、合法的權益を共同して勝ちとり、彼らが本当に自己の合法的利益を手に入れ、自己の権利を防衛できるようにする必要性を感じました。



僑日共済会本支部第一次聯合会で委員長に

1922年4月、中国人労働者の境遇を改善し、各方面の搾取に抵抗するため、祖父



労働現場を視察する王希天（中央）

王希天を中心に「中華僑日共済会」の組織化を發起し、成立させて、彼自らが会長職に就きました。中国人労働者を保護する一連の活動を始め、自ら出向いて、当局に中国人労働者の賃金を時間通りに耳をそろえて支払うよう要求し、人夫頭が中国人労働者の賃金をピンハネしないようにと交渉し、日本政府に対しては、人夫頭が中国人労働者を殴るなどの野蛮な行為をやめ、彼等が中国人労働者を平等に取り扱うよう

要求しました。同時に、日本各界の進歩人士と連絡を取り、中国駐日公使が表に立って日本政府と交渉し、不合理な禁止令や追放令を取り消すことを要求し、旅日華僑が日本で正常に働き、営業できるよう促しました。共済会の努力、祖父と共済会その他の人士の斡旋下、不断の努力によって、遂には改善を実現しました。

それと同時に、祖父は、中国人労働者を訪問する過程で、その居住生活環境がひどく劣悪で、一平方に三人が混み合っ居住し、部屋には窓はなく、悪臭が耐え難く、容易に伝染病に罹り易いことが分かりました。このような状況を見て、共済会は「医療部」を組織し、時に応じて労働者の身体検査を行い、疾病を発見すれば治療を行い、労働者にとっても歓迎されました。

少なからぬ中国人労働者は、幼い頃から教育を受けておらず、大部分は文化知識がなく、多数は日本語を解せず、至る所で差別を受けている状況を見て、祖父は共済会にさらに「教育部」を作る決定をし、留日学生 20 数人を教育係として労働者夜学を開き、彼等に識字教育をし、日本語授業を設け、文化を伝え、労働者から大いに歓迎され、とりわけ古い友人である周恩来の賞賛と支持を得ました。

中国人労働者と断えず接触する過程で、一部の労働者は生活に困窮し、生きていくことすら難しいことが分かると、共済会に「慰問部」を設け、祖父自ら共済会の会員とともに困難な労働者を訪れ、制度を設け、定期的に労働者の生活状況に注意を払い、労働者が困難を解決する手助けをし、日本在留労働者の生活面、健康面、教育面において大きな改善がみられました。祖父が率いる共済会の業績には終わりがありませんでした。

こうした労働者は、1993年に仁木ふみ子さんが温州山地の90歳の高齢になった彼らを訪問した時、彼ら中国人労働者の当時のリーダーだった王希天をしっかり覚えていました。

四、我々に模範を示してくれた

今日、私たちはここにおいて、いま一度祖父王希天を追悼したいと思います。中日両国人民が歴史を記憶し、過去を忘れないようするために。いま、私たちは安心して現在の中国が確実に成長し強大になっていることを見ることが出来ます。月面に降り立ち、オリンピックを成功させ、A I I B [アジア投資銀行] を成立させ、G 20 サミットを開催するなど、そのいずれもが中国人民はすでに世界先進国の隊列に入りつつあり、“一帯一路”の壮大な心意気が、世界各国の注目を集めていることを、世界に知らしめています。世界各地の千万華僑は、祖国の強大さを自負し、何回にもなる緊急時のアフリカ撤退プロジェクトは、世界に祖国の強大さと中国の威厳を示しました。

第二に、祖父王希天が関心をもつ広大な労働人民大衆が、まさに中国改革開放以来生活の質の向上を感じ取り、住居、社会保障、医療、教育などの分野において、発達した国家にまさに追いつきつつあります。私たちには、まだ多くの不十分な点があるけれども、現在は、永い年月のなかで、中国人が最も意気昂然であり、最も誇りに思う時期です。

私たち王希天の遺族は、みなさん同様に、中国改革開放以来、各種の政策を享受し、生活は満ち足り安定したものとなっています。私たちは祖父王希天の祖国を熱愛する精神を継承することを決意し、“国家の興亡には、一般民衆も責任を負う”こと踏まえ、中国人労働者の熱情と行為が、中国の暮らしが向上し安定した国になるための行動に転化し、公民の本分をしっかりとわきまえ、一生懸命人民に奉仕する優れた中国人となることに注目したい。同時に、私たちは、中国に友好的な日本人民と、かつての日本軍国主義及び極右分子とを区別することができます。今日、私たちは、日本には田原洋さんや仁木ふみ子さんのような良識ある日本人に出会っています。彼等は、勇気をもって過去の歴史を受け入れ、日本人民にその真実自体を語る事が、他でもない歴史を認識し、きちんとその責任を負うことだとしています。このため、中国人民と私たち遺族は、そのことを永遠に深く心に刻みます。最後に、この追悼の集いが成功することを祈ります。最後に、私たちは、王希天の遭難の地に記念碑を建立することを望んでいることを申し添えます。

ご静聴ありがとうございました。

2017年9月12日

王希天先烈記念座談会にて